

トロツキー

TROTSKY STUDIES

研究

No.73(最終号)

Winter-Spring 2018-2019



<特集1>トロツキー研究所の閉鎖によせて

西川伸一、森川辰文、長堀祐造、早野一、松下知、国富建治、
宮下武美、志田昇、山本ひろし、西島栄、湯川順夫

<特集2>ロシア革命100周年(下)

トロツキー「釈放後の最初の演説」

トロツキー「ペトログラード・ソヴィエト議長就任の第一声」

トロツキー「権力のための直接的闘争に向けて」

トロツキー「言葉の時期は終わった」

トロツキー「ペトログラードの危機と平和のための闘争」

トロツキー「ペトログラード・ソヴィエトから前線へ」

トロツキー「臨時政府は打倒された」

ストゥーチェ「マンデル伝」(10)

[編集・発行] トロツキー研究所

Trotsky Institute of Japan

とって真の知的宝庫であると言えるでしょう。

最後に、改めて、トロツキー研究所事務局員一同、これまでトロツキー研究所の会員として、あるいは『トロツキー研究』の定期購読者として、トロツキー研究所を支えてくださったすべての人に感謝申し上げます。

日本におけるトロツキー研究の金字塔

——『トロツキー研究』終刊に寄せての雑感

西川伸一

「こんな記事がある」母親がこう言って私に見せたのは、一九八七年一月六日付の『朝日新聞』夕刊の記事だった。「風車」という囲み記事で、タイトルは「トロツキー再評価」となっている。まだ私は大学院の博士後期課程二年生だった。トロツキーの永続革命論に強い影響を与え、一方ではロシア革命を資金面で支えて「革命の商人」とよばれたパルヴス（ヘルファント）

が当時の私の研究テーマ^{*}だった。母親は私の本棚に「トロツキー」という文字が入った本がいくつか並んでいるのに目を留めて、その記事を薦めてくれたのだろう。

※これがいかに私の研究能力を超えるものであったかについては、その後私が研究テーマを大きく変えていく経緯とともに、『トロツキー研究』第五〇号（二〇〇七年夏）に「ぼくと語学とパルヴス研究」と題して言い訳めいた駄文を書いた。

記事の内容はソ連で刊行されていた百科事典『大口シア社会主義革命』の新版に、ソ連の正史から抹消されていたトロツキーが復権を果たして、項目が立てられたとするものだ。実物を見ると、確かに五三〇頁に『Поиск』と出ている。そして、これと軌を一にするかのように日本でも、上島武・中野徹三・藤井一行の三氏共著による『トロツキーとゴルバチョフ』が窓社から刊行されたなどと記事は続く。この本を私も購入し

た。いま開いてみると、「レーニンのこの時期（一九〇五年革命期）の永続革命論は、パルヴス・トロツキーの場合のように、ロシア社会史の特質の分析から導きだされたものではなく、その後も彼は以前の見解と永続革命論の帰結との間を正面から理論的につめようとせず、またふたたび公然と永続革命の支持を主張することもなかった」との記述（一〇五頁・中野徹三執筆箇所）に傍線が引かれていた。巻末には「八八年二月四日読み終わる」と書いてあった。一九八九年一月にはベルリンの壁が崩壊する。

一九九〇年一月九日付『朝日新聞』夕刊の「深海流」という囲み記事は、「トロツキーの復権」と見出しを打っている。同年一月二日・三日の両日に東大農学部講堂で開催された国際シンポジウム「現代史の激動とトロツキー」の様態を報じたものだ。「会場は二日とも聴衆で埋まった」とやや興奮気味である。同月二二日付『読売新聞』夕刊もこのシンポジウムを取り上げている。とはいえ、シンポジウムから二〇日も過

ぎており、記事には「このほど」とあっていつ開かれたかは明記されていない。見出しも「トロツキー没後五〇年シンポジウム」とおとなしめだ。トロツキーをめぐる両紙のスタンスの違いは興味深い。

このシンポジウムがきっかけとなって、日本にトロツキー研究所が設立されたのが一九九一年五月である。だれもが予期しなかったソ連邦解体が七ヵ月後に迫っていた。同年一月には『季刊トロツキー研究』の第一号が刊行されている。これに気付いたからか、同年一月三〇日付『朝日新聞』夕刊「深海流」は「トロツキー研究解禁」の見出しで、「日本に初めて、トロツキー研究所（略）ができた」とこれまた少し熱いトーンで伝えている。私がトロツキー研究所の会員になったのはこの記事を読んだからだろうか。記憶はまったくくない。ただ、手元にある『季刊トロツキー研究』第一号が第三刷発行となっているので、もしかしたらそうかもしれない。加えて、今思うと第三刷まで売れたのかと驚きを禁じえない。

第一号こそ五六頁だったが、その後は二〇〇頁前後の堂々たる厚みの定期刊行物となった。一九九六年秋刊行の第二二号までは季刊である。次の第二二号（一九九七年春）からは財政事情を理由に年三回刊に変わった。それを予告する第一八号（一九九六年冬）の編集後記が痛々しい。「現在の会員数と定期購読者数では、『トロツキー研究』の年四回の発行を維持するのは非常に困難であり、今年中にこの財政事情に大きな改善がみられない場合、来年度から年三回刊に減らすことも考慮することになりました。あと五〇人会員が増えるか、一〇〇人定期購読者が増えるならば、年四回の『トロツキー研究』と事務所代と資料購入費を安定的にまかなうことができるようになります」（二七九頁）。同様の理由から第四六号（二〇〇五年春）からは「年二回刊として発行を続けていかざるを得なくなりました」（第四五号（二〇〇四年冬）「編集後記」二〇七頁）。

事務所経費を節約するためであろう。奥付に記され

るトロツキー研究所の所在地も当初の中野区東中野から第一三号（一九九四年秋）以降は都下の福生市熊川へ移されている。第四八号（二〇〇〇六年春）より先は福生市南田園が所在地になっている。

トロツキーが生活や活動に必要な資金をどのように工面していたのか、私にはわからない。だが、レーニンについては上述のパルヴス研究の過程で、彼が手紙や電報で経済的困窮を訴えている箇所をいくつか見つけた。たとえば、以下のとおりである（文中のゴシック体、傍点は邦訳全集のまま）。

私個人について言えば、手間賃が必要だ。でない
と、まったく死んでしまふ、ほんとに。物価騰貴はも
のすごいし、暮しを立てるすべがない。『レートピシ』
の出版者から強引に金を引きださなければならぬ。
〔略〕もう少しうまくいかなければ、ほんとうに、私はも
ちこたえられないだろう。これはまったく重大だ。まっ
たく、まったく。

「ア・シリヤブニコフへ」『レーニン全集』第三五卷、

二四六頁（一九一六年九月末から一〇月はじめまでに執筆。チューリヒからストックホルムあて）

（金がない、金がないのです!! こまったことはおもに、これです!）さようなら。

「ア・エム・コロンタイへ」『同』第三六卷、

三九四頁（一九一五年九月八日から一三日のあいだに執筆。ゼーレンベルク（スイス）からクリスチアニアあて）

われわれの旅行のために二〇〇〇クローネ、なるべくなら三〇〇〇クローネ準備されたし。水曜日「四月四日」にすくなくとも一〇人出発するつもり。電報頼む。

「ヨット・エス・ハネツキーへの電報」『同』第四三卷、

八〇〇頁（一九一七年四月一日に執筆。チューリヒからストックホルムあて）

もちろん、三つ目の電文はいわゆる封印列車でレーニンがスイスからロシアへ帰国を果たす直前に打たれたものである。ちなみに、〈革命には莫大な資金が要る。それゆえに革命家はよろしく資本家になるべきだ〉と開き直ったのがパルヴスだった。商才にも長けていた。彼についてトロツキーはこう述べている。「何よりもこの革命家（パルヴス——西川補記）は、金持ちになるというまったく思いもかけぬ夢にとりつかれていた。そして、当時彼は、この夢を自分の社会革命的構想とも結びつけていた」（トロツキー、森田成也訳『わが生涯』上、岩波文庫、三三一頁）。

前述の拙文も収められている第五〇号の「編集後記」には、「限られた予算とわずか三、四名の（無給の）スタッフだけでよく一五年間も研究所を維持してきたなあ、と深い感慨にかられます」（二一九頁）とある。これからさらに一〇年以上も「もちこたえ」た。そして、トロツキーの著作を丹念に掘り起こして精度の高

い翻訳を行ない、それを掲載してきた。併せて、トロツキーやロシア革命などについて学術的に有益な論文を次々に世に送り出してきた。こうして、まさに日本におけるトロツキー研究の金字塔を打ち立てたのである。今後のトロツキー研究者は『トロツキー研究』全七三号の業績を無視しては先に進めまい。ありがたいことに、『トロツキー研究』は国立国会図書館にきちんと納本され、全号がそこにそろっている。

毎号の奥付に掲げられている「トロツキー研究所の設立にあたって」には、「スターリン主義体制の確立以来、歴史から抹殺されてきた異論派、批判派の復権と正当な位置づけが不可欠です」と標榜されている。このミッションに窮状を顧みず全力で当たられたスタッフの方々に、衷心からの慰労を申し上げる次第だ。お疲れさまでした！